佐賀県武雄市北方方言

佐賀県方言区画図

【佐賀県の方言区画】九州の方言は肥筑方言、豊日方言、薩隅方言に三分されるが、佐賀県の方言は肥筑方言に属する。つまり、巨視的に見ると全県的に似たような方言が使用されているわけだが、無論、内部の違いもある。ここでは、小野（1983）の区画を示す。

小野（1983：92）では、佐賀県内の方言区画について、「おおむね旧藩政時代の領域をもとにした言語差が認められている。すなわち旧佐賀（鍋島）藩領と、旧唐津（小笠原）藩領並びに天領と、旧対州（宗）藩領との対立である。」と述べられている。さらに、「佐賀地区方言は東部地区と西部地区とに分けられる（ibid.）」とも述べてある。すなわち、大きくは3区分、そしてそのうちの一つに下位区分がある、という区画である。しかし、同書に示された方言区画図（p. 93）においては、この佐賀地区内の東西対立もさきほどの旧藩境による対立と同様の「方言境界」として示されているため、4 区分を同列に扱っているようにも見える。（佐賀県方言についての手に入れやすい入門書として藤田（編）（2003）があげられるが、同書においても上掲の区画が示され、それを「四区画案」としている（p. 3）。）旧対州藩領は、鳥栖市の田代地区であるため、田代地区方言とされている。

以上のように、田代地区、唐津地区、佐賀東部地区、佐賀西部地区、の 4 つに区分されている。

具体的な言語的差異としては、「代名詞語尾の「れ」」や、「動作進行態の「ている」」などがあげられている。これらを例に、方言差について述べる。

「代名詞語尾の「れ」」は、佐賀東部地区と佐賀西部地区は「イ」、唐津地区は「リ」、田代地区は「そり舌音ともみなすべき「ル」」であるとされている（小野 1983：93）。そのため、「これ」を例にとると、「コイ」（東西佐賀地区）、「コリ」（唐津地区）、「コル」（田代地区）という形がそれぞれ観察されるようだ。

続いて、「動作進行態の「ている」」の差異については、「書いている」を例にとると、「カキヨッ」（佐賀東部地区）、「カキヲー」（佐賀西部地区）、「カキヨル」または「カキョル」（唐津地区と田代地区）というような変異が見られるようである（小野 1983：94-95）。

【北方方言について】本稿で取り上げるのは、武雄市（たけおし）の北方（きたがた）の方言である（以下、北方方言と称する）。同方言は上述の区画では、佐賀西部地区に属する。上述した佐賀西部地区の特徴、「コイ（これ）」、「カキヲー（書いている：動作進行）」ともに観察される。

【表記について】上の方言区画の項において、先行研究の「動作進行態」の「カキヲー」という記述を引用したが、本稿もこの表記に倣う。「ヲ」の子音は両唇接近音である。語末の「ッ」は声門閉鎖音で実現するのが典型的なようである。

【調査概要】本稿の記述は、佐賀県武雄市北方地区に1935 年に生まれ、当地で育った男性 1 名に対する面接調査にもとづく。調査は 2018 年 9 月、10 月に行われた。

佐賀県武雄市北方方言の活用表

《動詞》

		多段型　書く	一段型　見る	二段型　閉める
終止類	断定非過去	カク	ミッ	シムッ
	断定過去	キャータ	ミタ	シメタ
	命令	カケ	ミロ	シメロ
	禁止	カクナ	ミンナ	シムンナ
	意志	カコー	ミュー	シミュー
	推量	カクジャロー	ミッジャロー	シムッジャロー
接続類	連体非過去	カク	ミッ	シムッ
	連体過去	キャータ	ミタ	シメタ
	中止	キャーテ	ミテ	シメテ
	仮定	カクナイ	ミンナイ	シムンナイ
派生類	否定	カカン	ミン ミラン	シメン
	丁寧	（該当形　欠）	（該当形　欠）	（該当形　欠）
	使役	カカスッ	ミサスッ	シメサスッ
	受身	カカルッ	ミラルッ	シメラルッ
	可能	カキユッ	ミユッ	シメユッ
	尊敬	カキンシャー	ミンシャー	シメンシャー
	継続	カキヲー キャートー	ミヲー ミトー	シメヲー シメトー
	希望	カキタカ	ミタカ	シメタカ
	のだ	カクト	ミット	シムット

		来る	する
終止類	断定非過去	クッ	スッ
	断定過去	キタ	シタ
	命令	コイ	セロ
	禁止	クンナ	スンナ
	意志	キュー	シュー
	推量	クッジャロー	スッジャロー
接続類	連体非過去	クッ	スッ
	連体過去	キタ	シタ
	中止	キテ	シテ
	仮定	クンナイ	スンナイ
派生類	否定	コン	セン
	丁寧	（該当形　欠）	（該当形　欠）
	使役	コラスッ	サスッ
	受身	コラルッ	サルッ
	可能	キーユッ	シーユッ
	尊敬	キンシャー	シンシャー
	継続	キヲー キトー	シヲー シトー
	希望	キタカ	シタカ
	のだ	クット	スット

多段型動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例		活用形例(過去形)	作り方
k	書く	kak・u	キャー-タ	k を i にする。さらに「ai>jaa」「oi>jee」という形態音韻規則をかける。「行く」ik・u は k を促音にし「イッ-タ」。
	置く	ok・u	イェー-タ	
g	嗅ぐ	kag・u	キャー-ダ	g を i にし、ai、さらに「ai>jaa」「oi>jee」という形態音韻規則をかける。-タが-ダになる。
	漕ぐ	kog・u	ケー-ダ	
s	出す	das・u	ジャー-タ	s を i にし、ai、さらに「ai>jaa」という形態音韻規則をかける。四つ仮名の区別はないため、「ジャータ」と表記する。
t/c	立つ	tac・u	タッ-タ	t/c を促音にする。
n	死ぬ	sin・u	シン-ダ	n を撥音にする。-タが-ダになる。
b	飛ぶ	tob・u	トー-ダ	b を長音にする。-タが-ダになる。
m	飲む	nom・u	ノー-ダ	m を長音にする。-タが-ダになる。
r	切る	kir・u	キッ-タ	r を促音にする。
w/ø	買う	ka(w)・u	コー-タ	w を u に変える。「au＞oo」という形態音韻規則をかける。

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		大きい	立派（だ）	学生（だ）
終止類	断定非過去	フトカ	リッパカ	ガクセー
	断定過去	フトカッタ	リッパカッタ	ガクセージャッタ
	推量	フトカロー	リッパカロー	ガクセージャロー
接続類	連体非過去	フトカ	リッパカ	《ガクセーノ》
	連体過去	フトカッタ	リッパカッタ	ガクセージャッタ
	中止	フトーシテ	-	ガクセーデ
	仮定	フトカナイ	リッパカナイ	ガクセーナイ
派生類	否定	フトーナカ	リッパジャナカ	ガクセージャナカ
	なる	フトーナル	リッパニナル	ガクセーニナル
	丁寧	（該当形　欠）	（該当形　欠）	（該当形　欠）
	のだ	フトカトジャ	リッパカトジャ	-

1. 動詞の活用の特徴

(1)活用型と語類の対応

北方方言の動詞活用の種類は大きく、規則活用と不規則活用にわけられる。規則活用として、多段型、一段型、二段型の三つがあげられる。不規則動詞は、「スッ（する）」と、「クッ（来る）」の二つが今のところ見つかっている。

多段型には古典語の四段活用動詞とナ行・ラ行変格活用動詞（本シリーズの a 類）と古典語の下一段動詞「蹴る」が所属する。一段型には、古典語の上一段活用動詞と上二段活用動詞が所属する。二段型には古典語の下二段活用動詞が所属する。

多段型の基幹には、アイウエオの五段と音便形がある。基幹を「カク（書く）」を例に示すと、カカ-ン（kak・a-N）、カキ-ヲー（kak・i-woR）、カク-ナ（kak・u-na）、カケ（kak・e）、カコ-ー（kak・o-R）となる。語幹末子音には k、g、s、t、n、b、m、r、w の 9 つがある。

一段型動詞の基幹はイ段がある。ミ-ッ（mi-Q）、ミ-ロ（mi-ro）などである。実は意志形はミューであるため、実態に即した命名をするならば一段動詞ではなく“二段型動詞”とすべきだが、本シリーズの例に倣い一段とする。九州方言によく観察されるいわゆる五段化（多段型 r 語幹化）は限定的であり、否定形のみに観察される。

二段型動詞の基幹はウ段とエ段である。「開ける」を例にとると、アク-ッ（aku-Q）やアケ-ロ（ake-ro）である。これも、上記の一段型動詞と同様、意向形

はアキューであるため、“三段型動詞”という命名の方が実態に即している。二段型動詞の五段化は今のところ、語幹が子音のみの「ヌッ（寝る）」の否定形にのみ確認されており、「ネン（寝ない）」「ネラン（寝ない）」の両方が認められる。ただし、「シメラン」（閉めない）や「カンガエラン」（考えない）などは非文法的とされる。

不規則活用動詞は「スッ（する）」「クッ（来る）」の二語である。いずれも、おおむねイ段とウ段の基幹を持つ二段型動詞に類似しているといえる。また、可能形で「シーユッ」「キーユッ」と基幹部分が長音化する点も特殊である。

本方言の音便の詳細はまだよくわかっていない。kを語幹末に持つ動詞の場合、原則的には上記の表のとおりであるが、「浮く」の場合、過去形は「ウイタ」となり、予想される「イータ」とはならない。詳細な研究が今後必要である。

(2)各活用形の特徴

〈断定非過去形〉

・テガンバ　カク。（手紙を書く。）
・コケー　オー。（ここにいる。）
・オイワ　ミャーニチ　テレビバ　ミッ。（私は毎日テレビを見る。）
・シゴトバ　スッ。（仕事をする。）

断定非過去形の特徴として、末尾の促音や長音があげられる。一つの動詞の語末が促音・長音双方を持つ場合と、片方しか持たない場合とがあるようである。特に、一段型動詞と二段型動詞、およびr語幹多段型動詞（すなわち、標準語で断定非過去形の末尾が「る」となる動詞）は、促音と長音の双方が認められる傾向にある。今のところ、後続する終助詞による変異かと思われるが、終助詞の全容もわかっていないため、この点も今後の課題である。

・ミーヨ。（見るよ）
・ミッバイ。（見るよ）

「死ぬ」を意味する動詞は基本的には多段型であるが、断定非過去形に「シヌ」と同時に「シン」という形も持つ点で特徴的である。

・シン。（死ぬ。）

なお、「ノム」（「飲む」）なども終助詞の「バイ」が続けば「ノンバイ」（「飲むよ」）のようになるが、これは単独では「ノン」にはならない。もちろん、「死ぬ」の場合「シンバイ」（「死ぬよ」）となる。

なお、断定と連体の間での語形の違いは、過去でも非過去でも、今のところ観察されていない。

〈断定過去形〉

多段型は基幹音便形、一段型は基幹（＝語幹）、二段型は基幹エ段形、「来る」「する」は基幹イ段形に「タ」「ダ」を付す。断定非過去形は音便が複雑であり、上述の通り、今後詳細な研究が必要である。

・テガンバ　キャータ。（手紙を書いた。）
・サッカラマデ　オッタ。（さっきまでいた。）

〈命令形〉

多段型はエ段形、一段型は「基幹-ロ」、二段型および「する」は「エ段形-ロ」となる。他の九州北部方言で見られるような一段動詞の多段化は命令形には確認されなかった。「クッ（来る）」の命令形は特殊である。

・ソトサン　デロ。（外に出ろ。）
・テガンバ　カケ。（手紙を書け。）
・コケー　オレ。（ここにいろ。）
・シゴト　セロ。（仕事をしろ。）

〈禁止形〉

・ソガン　キタノー　カクナ。（そんなに汚く書くな。）
・ガントケ　オンナ。（こんなところにいるな。）

すべての動詞において、断定非過去と同じ基幹を用いる、非常に規則的な活用になっている。

〈意志形〉

多段型は「カコー」などオ段長音形、一段型・二段型・「来る」「する」は「ミュー（見よう）」などイ段拗音形となる。

・カコー。（書こう。）
・イットキバッカイ　ココニ　オロー。（しばらくここにいよう。）
・イッショニ　ココニ　キューカ。（一緒にここに来よう。）
・イッショニ　シューイ。（一緒にしよう。）

「カコーサイ」「カコーダイ」や「シューイ」のように種々の終助詞が続くのが特徴的である。

〈推量形〉

非過去の形に「ジャロー」と「ヤロー」が続く形である。どちらの場合も文法的である。表には「カ

クジャロー」を示したが、実はこれは推定される形で、調査では「カクヤロー」が得られた。

・カクヤロー。（書くだろう。）
・ジキ　シヌジャロー。（すぐ死ぬだろう。）
・ミッジャロー。（見るだろう。）
・モージキ　クッジャロー。（もうすぐ来るだろう。）

今のところ、「クージャロー（来るだろう）」のように長音の後に「ジャロー」が続く形は確認されていない。

〈連体非過去形〉

連体非過去形は断定非過去形と同形である。ただし、後続する名詞が鼻音で始まる場合に、末尾の促音もしくは長音が撥音化することがある。ただし義務的ではない。

・スン　モンモ　オー。（する人もいる。）
・クン　モンモ　オー。（来る人もいる。）
・カク　モンモ　オー。（書く人もいる。）
・コドモガ　オー　イエ。（子供がいる家。）
・ミル　コタ　ナカ。（見ることはない。）
・テレビバ　ミッ　トキワ　ハナイロー。（テレビを見る時は離れろ。）

「死ぬ」の連体非過去形として「シヌル」は非文法的とされた。

〈連体過去形〉

連体過去形は断定過去形と同形である。

・コノ　ホンバ　キャータ　ヒトニ　オータ。（この本を書いた人に会った。）〈中止形〉

過去形と同様の基幹と音便形を用いる。

・テガンバ　キャーテ　ダサンバナー。（手紙を書いて出さなくちゃな。）
・シャテーワ　ココニ　オッテ　アニジャイモンワ　トーカ　トケー　オル。（弟はここにいて、兄は遠いところにいる。）
・アサー　ドラマ　ミテ　ヒルモ　ドラマ　ミッ。（朝はドラマを見て、昼もドラマを見る。）

〈仮定形〉

仮定を表す形は多様である。ここでは「ナイ」を例に示す。これは非過去形と同様の形に「ナイ」を続ける。非過去形の促音は、撥音や長音に変わる。

・イマ　カクナイ　ヨカバイ。（今書けばいいよ。）
・アーワイショーガ　オーナイ　ヨカ。（あの人がいればいい。）
・アイガ　クンナイ　ウレシカロー。（あの人が来れば嬉しいだろう。）
・ソノ　シゴト　スンナイ　ヤスマルッバイ。（その仕事をすれば、休めるよ。）

この「ナイ」には「バ」が続くことがあるが、今のところ「ナイ」と「ナイバ」の違いは分かっていない。

・ミンナイバ　ワカー。（見ればわかる。）
・イマ　カクナイバ　ヨカバイ。（今書けばいいよ。）

このほかに「ギン」という形もある。これも、非過去形と同じ形に「ギン」を続ける。

・イマ　カクギン　ヨカバイ。（今書けばいいよ。）

これらの仮定を表す語形間の差は未詳である。

〈否定形〉

多段型はア段形、一段型は基幹、二段型はエ段形、「来る」は「コ」、「する」は「セ」に、それぞれ「ン」を付す。

・テガミバ　カカン。（手紙を書かない。）
・キューワ　アイショーワ　オラン。（今日はあの人はいない。）
・オイワ　アンマイ　テレビ　ミン。（私はあまりテレビを見ない。）

いわゆる一段動詞の五段化は、音節数の短い動詞の、否定形のみで観察された。「ミラン（見ない）」「デラン（でない）」などは可能であるが、「ミラスッ（見させる）」や「カンガエラン（考えない）」は確認されていない。否定形の活用は現段階では不明である。

〈丁寧形〉

「書きます」は言えるが、方言ではなく、別のスタイルであるという認識のようである。本稿では話者のその判断を尊重し、表では「該当形　欠」とした。

〈使役形〉

・カカスッ。（書かせる。）
・オサスッ。（いさせる。）
・ミサスッ。（見させる。）
・コラスッ。（来させる。）
・サスッ。（させる。）

規則動詞の使役形は否定形と同じ基幹に、多段型

は「スッ」を、一段型と二段型は「サスッ」を付すのが基本である。「オル（いる）」の使役形は特殊で、「オサスッ」という形をとる。不規則動詞は不規則である。使役形の活用は現段階では不明である。

〈受身形〉

・カカルッ。（書かれる。）
・オラルッギン　コマー。（いられると困る。）
・ヒトカラ　ミラレタ　ゴター。（人に見られたようだ。）
・コラルッ。（来られる。）
・サルッ。（される。）

規則動詞の受け身形は否定形と同じ基幹に、多段型は「ルッ」を、一段型と二段型は「ラルッ」を付す。不規則動詞は、不規則であるが、使役形と同様の基幹を用いる。受身形の活用は現段階では不明である。

〈可能形〉

可能を表す形は「カカルッ（書ける）」など多様であるが、ここでは「ユッ」を付す形を示す。能力可能、状況可能など、意味的な特徴は未詳である。

・カキユッゴト　ナッタ。（書けるようになった。）
・ヒトイデン　オイユッカー。（一人でもいられるか。）
・ミユッ。（見られる。）
・キーユッ。（来られる。）
・シーユッ。（できる。）

五段型はイ段形、一段型は基幹、二段型はエ段形に「ユッ」が付く。「オイユッ（いられる）」が特殊で「イ」となるのかどうかは不明である。「スッ（する）」「クッ（来る）」は長音になる点が特徴的である。この「ユッ」による可能形の活用は現段階では不明である。

〈尊敬形〉

尊敬を表すと思われる形は「ヤッ」「ンサー」など、多様であるが、ここでは「ンシャー」という形を示す。

・イェバ　カキンシャーバイ。（絵をお描きになるよ。）
・オンシャー。（いらっしゃる。存在の尊敬）
・ミンシャー。（ご覧になる。）
・キンシャー。（いらっしゃる。移動の尊敬）
・シンシャー。（なさる。）

五段型および「来る」「する」はイ段形、一段型は基幹、二段型はエ段形に「ンシャー」が付く。「オンシャー（いらっしゃる）」が「ン」となるのは、この語が例外なのか、他の r 語幹動詞も同様なのか、確認ができていない。この「ンシャー」による尊敬形の活用も現段階では不明である。「死ぬ」の尊敬を意味する動詞は別語として「ナクナー」がある。

〈継続形〉

継続形には進行と結果継続の二種類がある。進行は、多段型と一段型はイ段、二段型はエ段の基幹に「ヲー」を付す。「シヌ（シン）」は「シンヲー」という形もある。

・カキヲー。（書いている。）
・ビッキーノ　シンヲー。（カエルが死につつある。）
・イマ　ミヲー。（今、見ている。）
・キヲー　サナカジャナカローカ。（来ている最中ではないだろうか。）
・シヲー。（している。）

結果継続の方は、過去形と同じ基幹に「トー」「ドー」を付す。

・キャートー。（書いている。）
・カエルノ　シンドータイ。（カエルが死んでいる。）
・キトーバイ。（来ているよ。）
・シトー。（している。）

両形とも活用は現段階では不明である。

〈希望形〉

希望を表すと思われる形は「ゴト」を用いたものもあるようだが、ここでは、「タカ」を用いた形を示す。

・イェンピツデ　カキタカ。（鉛筆で描きたい。）
・コケ　オイタカ。（ここにいたい。）
・テレビバ　ミタカ。（テレビを見たい。）
・コケー　マタ　キタカ。（ここにまた来たい。）
・シタカ。（したい。）

多段型と「来る」「する」はイ段形に、一段型は基幹に、二段型はエ段形に、それぞれ「タカ」を付す。この形は形容詞に準じた活用をする。

〈のだ形〉

表には標準語の「～の」に相当する語形で掲載しているが、実際の使用の際は「～の」までで終える

ことは稀と思われる。「の」に相当する「ト」のあとに「バイ」「ジャロー」「ヤッタ」など、なんらかの要素が後接するのがふつうのようである。そして、「ト」の部分が促音化する形が頻繁に観察される。

・カクッジャロー。（書くんだろう。）
・アカンボーノ　オットジャロネー。（赤ん坊がいるんだろうね。）
・ダイナイト　クットジャロー。（誰か来るんだろう。）
・スットジャローネ。（するんだろうね。）

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

本方言の形容詞はいわゆるカ語尾である。今のところ分かっている形容詞の活用の種類は一つである。中止形、否定形、なる形では語幹末母音がａの語の場合などは、「アカカ（赤い）」「アコー　ナル（赤くなる）」のように母音が交替する。ここでは語幹末がｏの「フト-カ」で代表させる。

〈断定非過去形〉

語幹に「カ」を付す。

・キショクニ　フトカ。（大変大きい。）

〈断定過去形〉

語幹に「カッタ」を付す。

・キショクニ　フトカッタ。（大変大きかった。）

〈推量形〉

語幹に「カロー」を付す。

・フトカローネー。（大きいだろうね。）

〈連体非過去形〉

連体と断定の違いはない。

・フトカ　イヌ。（大きな犬。）

〈連体過去形〉

過去形も連体と断定は同形である。

・フトカッタ　コロワ　シラン。（大きかった頃は知らない。）

〈中止形〉

語幹の長音形に「シテ」を付す。上述のとおり、語幹末母音が交替する場合があると思われるが、詳細は不明である。

・アンジャイモンワ　フトーシテ　シャテーワコマンカ。（兄は大きくて、弟は小さい。）

〈仮定形〉

断定非過去形に「ナイ」を付す。

・フトカナイ　ヨカ。（大きければいい。）

〈否定形〉

語幹の長音形に形容詞「ナカ」が続く。この場合も語幹末母音が交替する場合があると思われる。

・フトー　ナカ。（大きくない。）

〈なる形〉

語幹の長音形に動詞「ナル」が続く。この場合も語幹末母音が交替する場合があると思われる。

・フトー　ナッタ。（大きくなった。）

〈丁寧形〉

動詞と同様、「です」を付した形は言えるが、これは方言ではないという判断であったので、ここには示さない。

〈のだ形〉

動詞と同様、「のだ」相当形式で文を終えることはほぼないと思われる。何かしらの後続要素が必須のようである。

・フトカッジャローネー。（大きいんだろうね。）

【形容名詞述語・名詞述語】

コピュラは「ジャ」「ヤ」双方が認められるが、「ジャ」の方がより伝統的であるという話者の認識を反映させ、「ジャ」を代表形として記述する。

形容名詞は、ほとんど形容詞と同じ活用を示すが、派生類は、名詞類と同形である。

〈断定非過去形〉

断定非過去の場合、名詞述語文はコピュラを取らない。名詞のみで終えるか、「バイ」「タイ」などの終助詞を付す。形容名詞の場合は「カ」を付す。

・タローワ　ガクセーバイ。（学生だよ。）
・アンヒタ　リッパカ。（あの人は立派だ。）

〈断定過去形〉

過去の場合などの場合は、コピュラは必須となる。形容名詞の場合は「カッタ」を付す。

・キョネンマデ　ガクセージャッタ。（去年まで学生だった。）
・アンヒター　キレーカッタ。（あの人は綺麗だった。）

〈推量形〉

名詞は「ジャロー」、形容名詞は「カロー」を付す。

・マダ　ガクセージャロー。（まだ学生だろう。）

・イマワ　リッパカローネー。(今は綺麗だろうね。)

〈連体非過去形〉

名詞の場合は助詞ノを付す。形容名詞の場合は断定非過去と同形である。

・ガクセーノ　トキ　ジャッタケン。(学生の頃だったから。)

・リッパカ　ヒト。(綺麗な人。立派な人。)

〈連体過去形〉

断定過去形と同じである。

・ガクセージャッタ　トキ　コケ　キタ。(学生だった時、ここに来た。)

・リッパジャッタ　トキ。(立派だった時。)

〈中止形〉

名詞述語の場合は「デ」を付す。形容名詞述語の中止形は今回の調査では得られなかった。今後の調査によって得られるかもしれない。

・シャテーワ　ガクセーデ　ニーチャンナ　センセージャッタ。(弟は学生で兄は先生だった。)

〈仮定形〉

名詞述語の場合は名詞に「ナイ」を付し、形容名詞述語の場合は断定非過去形「ーカ」に「ナイ」を付す。

・ガクセーナイ　ヤス　ナータイ。(学生ならば安くなるよ。)

・リッパカナイ　ヨカ。(綺麗ならいい。)

〈否定形〉

名詞・形容名詞に「ジャ」を付し、形容詞「ナカ」が後続する。

・タローワ　ガクセージャナカ。(太郎は学生じゃない。)

・リッパジャナカ。(立派じゃない。)

「リッポーナカ」などの形容詞の否定と並行的にした形は非文法的とされた。

〈なる形〉

・ガクセーニ　ナー。(学生になる。)

・リッパン　ナー。(綺麗になる。)

名詞と形容名詞はいずれも、「ニ」と「ン」の両方が取れるようである。

〈丁寧形〉

動詞、形容詞と同様、「です」は使えるが、標準語であると判断されたため、ここには掲載しない。

〈のだ形〉

・リッパカトジャロー。(立派なんだろう。)

名詞述語の〈のだ形〉は今回の調査では得られなかった。今後の調査によって得られるかもしれない。

参考文献

小野志真男(1983)「佐賀県の方言」飯豊毅一ほか(編)『講座方言学 9　九州地方の方言』国書刊行会 pp. 87-112.

藤田勝良(編)(2003)『日本のことばシリーズ 41　佐賀県のことば』明治書院

(原田走一郎)